

季刊マーメイド

逗子市立図書館報
第 21 号
2019 年 7 月 1 日発行
逗子市立図書館
逗子市逗子 4-2-10
046(871)5998
<https://www.library.city.zushi.lg.jp>

『不如帰』と横浜正金銀行②

—横浜正金銀行編—

徳富蘆花の『不如帰』は逗子が舞台となった浪子と武男の悲恋の小説です。武男のモデルとされる三島弥太郎（みしま やたろう）は明治 44（1911）年に横浜正金銀行第 8 代



創建当時の横浜正金銀行
『横浜正金銀行』より

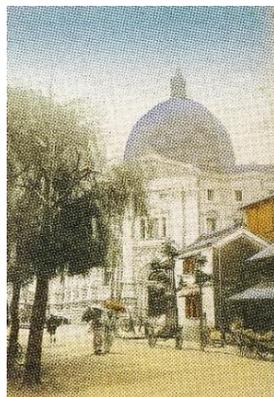
横浜正金（ししょうきん）銀行

頭取に就任しました。弥太郎の弟・弥彦（やひこ）はマラソンの金栗四三（かなくりしろう）と共にストックホルム五輪に出場した日本人初の選手です。彼も大正 2（1913）年に横浜正金銀行に入行し、昭和 18（1943）年に退職するまで長く勤務しました。本号では、『不如帰』に縁のある三島家の兄弟が勤めた横浜正金銀行について、ご紹介していきます。

横浜は安政 6（1859）年に開港して以降、対外貿易の中心でした。しかし、その貿易のほとんどは外国商人主導、外貨取引によって行われていました。日本の商人は、外貨の交換や相場の問題の不便さを解消しようと新しい銀行の設立を計画しました。

明治13(1880)年、大隈重信や福沢諭吉の力添えを得て、横浜正金銀行は開業しました。「正金」とは当時、金貨や銀貨など現金のことを意味していました。日本政府は外国銀行でのみ取り扱っていた外国為替を日本の銀行でも行えるようにし、外貨資金を増やすことを切望していたため、横浜正金銀行は徐々に外国為替銀行へと性格を変え、明治20(1887)年勅令により外国為替専門の特殊銀行となりました。

横浜正金銀行は拡大を続け、大正7(1918)年頃には香港上海銀行、チャータード銀行(英)と並ぶ世界三大為替銀行とみなされるまでに成長しました。当時の店舗数は国内5店、海外31店、行員数は日本人719人、外国人348人でした。



創建当時の横浜正金銀行
『横浜正金銀行』より

昭和12(1937)年に日中戦争が始まると外貨の管理が厳しくなり、英米系の通貨取引は消滅しました。昭和20(1945)年の第二次世界大戦敗戦後には、外国貿易や海外店との連携は絶たれ、外国為替取引も大蔵省令により禁止されました。さらにGHQの勸告により、横浜正金銀行の国内業務は「東京銀行(現在の三菱UFJ銀行)」に譲渡することが決まります。完全に譲渡業務が終了したのは昭和39(1964)年でした。

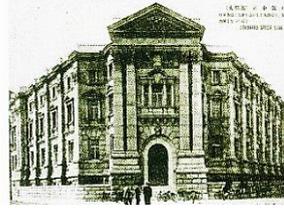
建築からみた横浜正金銀行

横浜正金銀行本店の建物が、現在の横浜市中区の馬車道に建設されたのは明治37(1904)年で、大きさは地上3階、地下1階、ドームの尖塔までは約35mの規模でした。

設計者は妻木頼黄(つまきよりなか)です。若い頃から海外で法律や建築を学んだ国際派の建築家で、横浜赤レンガ倉庫や大阪麦酒吹田工場など、煉瓦造りの建物を多く手掛けました。

しかし、建設からわずか19年後の大正12(1923)年、本店は関東大震災で被災しました。倒壊は免れたものの内部は地下を除いて火災に遭い、ドームも骨組みだけを残して焼け落ちました。行員たちは地

下に逃げこんだため命は助かりました。その後の復興工事では、ドームと正面の彫刻が撤去されました。



震災後の姿がない
『横浜正金銀行』
より

戦後、東京銀行に業務が譲渡されると、横浜正金銀行の土地と建物は神奈川県所有となりました。昭和39（1964）年にドーム部分を復元し、昭和42（1967）年に県立博物館（現在の県立歴史博物館）として開館しました。改修工事を何度も繰り返した建物ですが、今でも創建当時の面影をとどめる意匠が各所に残っています。

永井荷風と横浜正金銀行

横浜正金銀行と関わりのあつた人物の一人に永井荷風がいます。

明治36（1903）年に渡米した永井荷風は、切望していたフランス行きは、渡航費を稼ごうと、ワシントンにある日本大使館で働いていました。しかし日露戦争後に解雇され、父・

久一郎（きゅういちろう）の働きかけで横浜正金銀行ニューヨーク支店に勤務することになりました。

文学への思いが強かった荷風は、仕事の合間にメトロポリタン歌劇場に通い、オペラ鑑賞などを楽しみました。この頃に出会った女性との恋物語や生活の様子は作品『あめりか物語』に、そして後に渡ったフランスで音楽会に通う日々

の様子は『ふらんす物語』に描かれています。

明治41（1908）年、荷風は半年余り勤務した横浜正金銀行リヨン支店を辞職し、2ヶ月程パリに滞在後、帰国しました。フランスでの生活は1年弱と短いものでしたが、荷風のその後の作家活動や作品生き方に大きな影響を与えました。



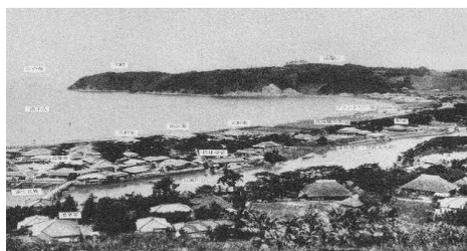
父・久一郎
『永井荷風展』
より



アメリカ滞在中の荷風
『図説永井荷風』
より

父・永井久一郎と逗子

荷風の渡米と渡仏を助けた荷風の父・永井久一郎は、アメリカ留学後、文部省、内務省、日本郵船の横浜支店長なども歴任した実業家でした。久一郎は逗子に別荘を建てました。明治28(1895)年新宿に「十七松荘」、明治35(1902)年には桜山に「対君山楼」を建てています。隣は徳富蘇峰の父・一敬(かずたか)の閑居でした。荷風もこれらの別荘を訪れ、家族と過ごしていたようです。初期の作品には逗子に向かう車窓の風景や、逗子海岸の様子が反映されているといわれています。明治42(1909)年発表の新聞小説『冷笑』の第二章「虫の音」は逗子の浜辺が登場します。



明治33年頃の新宿浜の別荘地の様子
写真左下が徳富家の別荘
『写真・資料で見る逗子の戦前・戦後』より

《逗子が登場する荷風の作品》

逗子は御存じの如く気候暖く候故、屋後の梅花已に綻び、門前の柳枝も青き眉を作らんと致し居り候……
『逗子より』
河原撫子の花さき初めたり。四十年前逗子田越川の松林中に撫子の花の多くさきし事を思越しぬ。
『断腸亭日乗』

〈主な参考資料〉

- 『写真・資料で見る逗子の戦前・戦後』
逗子に市立博物館をつくる会編・刊
(27.Z シ / P 213.7 シ)
- 『横浜正金銀行』
神奈川県立歴史博物館編・刊 (33.A ヨ)
- 『横浜今昔散歩』原島広至著
中経出版 (P 213.7 ハ)
- 『図説永井荷風』川本三郎・湯川説子著
河出書房新社 (910 カ)
- 『永井荷風展』神奈川県文学振興会編
県立神奈川県近代文学館 (90.A ナ)
- 『あめりか物語 改版』永井荷風著
岩波書店 (S F ナ)
- 『荷風小説傑作集 6 ふらんす物語』
永井荷風著 六興出版社 (F ナ・6)
- 『文学にみる「逗子」 2』森谷定吉著
モリヤ (90.Z モ・2)
- 『荷風全集』2巻・25巻 永井壯吉著
岩波書店 (918.6 ナ・2・918.6 ナ・25)